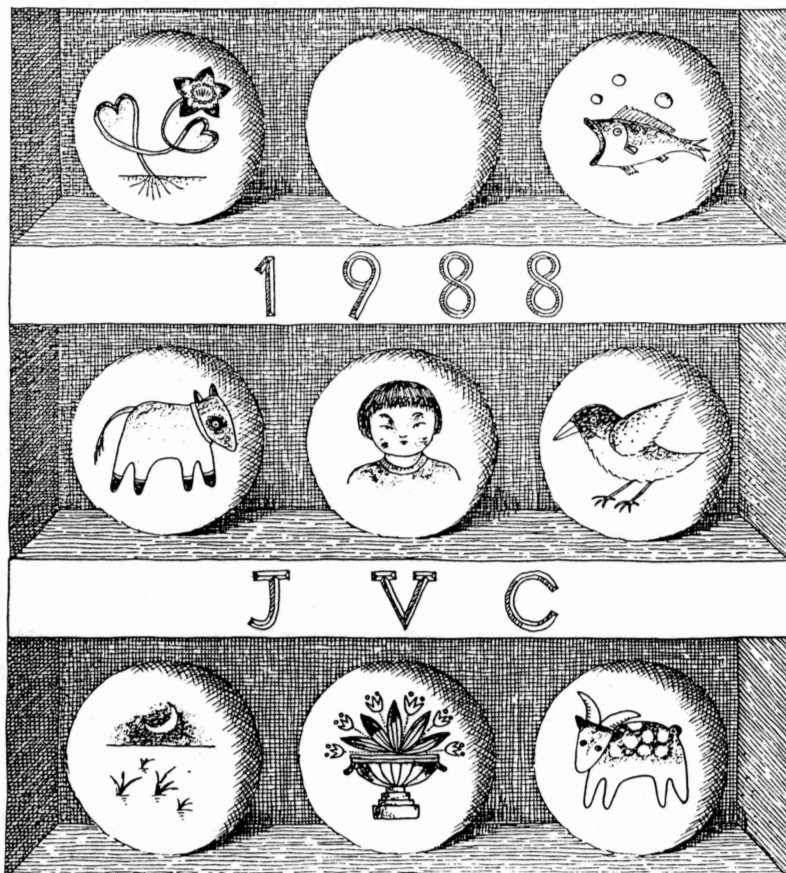


Trial & Error トライアル・アンド・エラー No.76

試 行 錯 誤



特集 地域の国際化とは

実感の内と外 — 地域の国際化とJVCの役割	2
生活のひとコマから第三世界をイメージできるか!	4
私は日本のおかあさん	6
地域から世界が見える	
・素晴しくもなく、気安めでもなく	8
・仙台で「マッ・ミー展」を	9
・コーヒー杯運動から	10
NGOを訪ねて	11
井戸修理ワークキャンプに参加して	12
JVC NEWS	14
MY DEAR FRIEND	16

実感の内と外

地域の国際化とJVCの役割

JVC代表 岩崎駿介

● はじめに

1988年が始まったばかりの今日、一月のこの日から、西暦2000年までには、ちょうど丸12年の歳月がある。しかし、西暦2000年の前に、1990年代という実質、10年の時代がやってくる。わたしの勝手な推測であるが、この1990年代こそ人類にとって、とても重要な10年になるように思う。変化は今以上に急速な勢いで進むであろう。今予測されている重要な問題、たとえば地球の土壤汚染、大気汚染、森林破壊と砂漠化などの生態的危機の問題、人間の体内に蓄積される化学汚染物質、ガンやエイズのようになかなか撲滅しがたい病気、精神的不安、あるいは石油の枯渇によるエネルギー資源問題、原子力発電にともなう環境汚染、そして先進国と開発途上国の利害対立のより一層の激化など、今は漠然としてはいるがいずれもっとはっきりとした形で解決しなければならない問題や不安が、より緊急な問題としてわれわれに解決を迫ってくるのが1990年代なのではないかと思うのである。

考えてみると、これらの問題はうちのおじいさんが死んでしまったとか、愛する息子が交通事故でけがをしたとか、今日は飯をいっぱい食べてよかったとか、あるいは会社で昇進した、恋人を見つけたなどという実感的なことではなく、われわれの毎日を遠く取り巻いている外側の事実である。われわれは、大気汚染や体内汚染で自分が病気になる、エイズにかかるなどということは、他人ならいざ知らず、自分に関係あるとは夢にも思わないで生活している。つまり、自分の実感としての世界とその外側の世界とを、なかなか結び付けて考えることができないのである。われわれは、一般にこの実感の世界を「地域」とよんでいる。この「地域」と、もうひとつのわれわれの実感を越えた外側の世界、つまり「国際的」な世界とを、どう結びつけるかが、編集部から

依頼されたこの文章の表題、「地域の国際化」という問題であり、それにかかわる「JVCの役割」に関する考察なのである。

● 「地域」とは

私は、われわれの実感の世界を「地域」とよぶと規定した。しかし一般に地域とは、自分の住んでいる村とか町、あるいは都市、さらにもう少し広い何々地方などという空間的、場所的なまとまりを意味して使われている。歴史的には、世界のいかなる地域においても、みずからのところで生産し、消費し、その循環を自己地域内で完結することによって、生活を維持してきた。しかし地域と地域は交易を始め、互いに物資の取得と消費を相互依存するようになって、地域連関性をつよめてきた。この傾向は時代とともに進展し、今では、ネジ一本、お茶菓子一つ、ブタ肉一切れがつくられるまでには、じつに複雑で長い物資移動の経路と距離を必要とするようになった。笑い話がある。ある人品いやしからぬ一人の紳士が、牧場に行った。牧場主が目の前の牛を指さして、「これが牛ですよ」といった。紳士は「これがどうしたのですか？」といぶかった。牧場主は「これがあのミルクをつくるやつですよ」。紳士は「冗談はやめて下さい。ミルクはスーパーで売っているのであって、ちゃんと工場で作られているんだから」。「あなたは何も知らないのですね。これが真実、ミルクをつくるのです」。「もし、それがほんとうなら、こんな動物が作るものを飲めるわけがないでしょう」と紳士は憤慨したというのである。

慶応大学の藤田祐幸氏は『エコロジーとエントロピー』という書物の中で、現代の地域の本質を次のように指摘している。「都会に生活するものにとって、スーパーマーケットの華やかな陳列棚の背後に広がる構造を見通すことは困難である。それぞれの食品

がいつ、どこで、だれによって生産され、どのように加工され、どのような添加物を加えられ、運ばれてきたものであるかを、われわれは知る必要もなく生活することができる。しかしまた知ろうとしても、厚い壁に遮られて知ることができない構造になっている」。

私はここで、人間にとっての「地域」というものを、もう一度正確に定義しておきたい。それは本質的に、「経済的・物質的循環と社会的・精神的循環とが重なりあって、ある空間的なまとまりをなしているところ」である。この場合の「経済的・物質的循環」とは物の流通をあらわし、「社会的・精神的循環」とは「実感しえる」ということとほぼ同意語である。つまり、その人にとって必要な物の循環・流通の経路がよく見え、かつその間に介在する人々と友好にして人間関係を結び結んでいる空間的範囲を、その人にとっての本来的な「地域」であるということが出来る。その意味で、現代におけるいかなる地域も、もはや「地域」としての本来の意味を失ってしまった。つまり、生活に必要な物質の循環がよく見え、実感しうる関係になっているという意味での「地域」はすでに崩壊してしまい、われわれの生活は、見えない関係、つまり実感できない空間を基盤に成立するようになったのである。

われわれが生きてゆくのに必要な「もの」は、いかなる遠い距離であろうと、確実にわれわれの手もとにやってくる。しかし、われわれはその経路をみることができない。明らかに、「もの」は人から人、場所から場所へと経由していながらも、その人、その場所を特定し、実感することができない。言ってみれば、実感できない世界を前提にして、口だけは糊して生命が維持されるという植物人間的、過剰保護的空間に生きなければならず、現代は、みずからの環境に働きかけることによって獲得しうる生きている実感、あるいは実存的空間を会得することができない、実に不幸な状況にあるといわなければならない。

● 地域の国際化

したがって、「地域の国際化」とは、すなわち「実感」を取り戻すことなのである。本来の意味での「地域」を回復することなのだといってもよい。実感しえる日常と、実感しえない外側の世界、あるいはわれわれの日常的な世界と、物によってたどることのできる国際的な世界とを結び付けることが、本

来的意味での地域の国際化であり、現代においてもっとも緊急に求められていることである。人間としての尊厳、地域自治、あるいは生態的環境の回復など、われわれが現在当面しているあらゆる問題は、極端に言えば、この「実感をとり戻すこと」、すなわち「地域が真の意味で国際化される」ことによって始めて、解決の可能性がでてくる。

● JVC の役割

それでは、その実感を回復する上で、何がもっとも大切だろうか。それは人々の「意志」そのものである。状況にみずから働きかけてゆく力である。そして、たぶんその力は「知る」ということから始まる。

したがって、われわれにできること、あるいはJVCの役割とは、日本の地域と海外の地域とを具体的に結ぶことである。海外の事実をより多くの日本人に「知って」もらうことである。その意味でわれわれは海外の対象地域に真摯であると同時に、その事実についてより積極的に日本人のたちにとってもらう努力をしなければならない。単なる客観的事実ではなく、その地域の人々と生活を共にして、初めて見えてくる事実を日本に伝えなければならない。「見る」とか「知る」ということは、自分を他の場所においたまま、それまで蓄積された枠組によって判断や評価をするのではなく、その場その状況を共にし、その場その状況の根源にある自然や人との関係を、その場において新しく発見することである。そして、この新しい発見こそ、伝えるに値する事実なのである。

われわれJVCは、海外の現場において獲得した事実をもって、日本の具体的地域、すなわち神奈川とか、東金とか、高岡や四国など、数多くの日本の地域の人々に接し、最終的にはこれら地域の人々が、海外の事実を実感しえるよう努力してゆかなければならない。人が事実を知ることとは、かならずしもすべてを知ることではない。ある事実を具体的に知ることによって、そのことから数多くの事実を類推することができ、自分のよって立つべき基盤についてのより正確で、広がりのある認識を持つことが大切なのである。「地域の国際化」とは、端的に言えば、地域の人を地域の外に連れ出すこと。地域の人が、海外の事実をより正確に「知る」ことによって、健康を回復し、ひいてはより永続的な地球社会を実現できるよう努力することである。

生活のひとコマから第三世界をイメージできるか！

中部リサイクル運動市民の会代表 萩原喜之

「古本フェア」は第三世界を考えるきっかけになった

私たち、中部リサイクル運動市民の会は、エコロジカルな共生社会（リサイクル社会）の実現をめざし、不用品の再利用・食・農・資源リサイクル・手づくり・第三世界ショップなど、様々な分野を入口に、まず身近なできるところからの生活の見直しを行っています。これらは生活提案という形でよびかけると共に、誰でも気軽に参加できる場とシステムづくりを行うことを活動の目的としています。ひとことで言えば「生活提案型運動」といえます。

このような国内運動といわれる私たちが第三世界に目をむけたのは、85年のアフリカの飢えがマスコミ等でさわがれていた頃です。生活提案、国内運動という立場から、自らの生活を見直すこととアフリカの飢えが少なからず関係しているということをアピールしたい。私たちの日常生活そのものが、南北の格差を生み出している要因となっている。それに気がついていないだけで、実は加害者なのだとすることを生活レベルで訴えることを考えてみました。

これが「古本のリサイクルフェア'85」という催しのベースになりました。家庭に眠っている古本を無料で提供してもらい、その古本を販売し集まったお金を援助に役立てようという設定でした。そして結果的には古本は27万冊集まり、その古本の売上げは1000万円を上回りました。この1000万円は、お金がどのように生かされるかがしっかり確認できる所ということで「JVC」を選び、ソマリアの農場建設に使ってもらうことにしました。

ただ、この催しでどれだけの人たちが自分の生活とアフリカの飢えとのつながりをイメージできたかは知るよしもありません。ブームにのった「かわいそうだから」というものが大きかったのではないかな、またイベントを成功させる主催者として、ついそちらの方がうけが良いことで流されてしまった向きもあったかと思います。ともあれ、いままでの「飢えているから何とかしてあげたい」から「自分たちはその加害者なのだ」というアピールをしながらのイベントは成功しました。これが、私たちが第三世界の問題を、生活見直しの入口のひとつとするきっかけになりました。



'85 古本フェア

第三世界の問題は自分たちの問題

私たちがめざすエコロジカルな共生社会というなかに2つの視点があります。ひとつは横軸として、今現在この地球上に生きている人たちが資源や環境をとともにわけあっていくということ。2つ目は縦軸として、未来に生きる人たち、まだ声を出せない人たちの分の資源や環境を残してあげられるかということです。

前者の視点は必然的に南北問題、第三世界の運動とフィットします。ただ日常生活から見直していくという点で非常にイメージしにくいということがあります。私たちは毎日の食事や買物の中で第三世界の人々のことをイメージできにくいのです。

ここで、国内運動といわれる人たちは第三世界の問題等には目をむけない。ということについて少しお話しをします。どこもそうなのですが、自分たちのテーマ、現場をこなすのに手いっぱいであるということ、また役割分担として考えて自分たちのテーマ以外は手を出さない等があるでしょう。ただ、運動の目標、到達点をどこに置いているかで、逆に、運動そのものが足をひっぱる場合もあります。

食べ物の運動を例にとると、まずは生活防衛という立場から、安くて良い物を手に入れる運動というのがあります。共同購入や生協がそれにあたります。その運動も量から質の時代に入り、安全性やその安全性を保障できる関係へと運動の質がつくられていきます。食品添加物や健康食品などの関心、グルメなどもこのワクに入るかと思います。ただこれは安全な食品の買いあさり運動となり、自分の食生活は

豊かになります。自分たちが安全な食品を手に入れることのみを追求することが、実は加害者という立場をとることにつながっていくことに気がついていません。物事の関係性、構造をイメージしている運動の質があるかが第三世界とつながれるかのポイントになると考えます。

食べ物運動には「見える関係づくり」ということばがあります。これは、農薬や添加物というものは使っているかどうかということをつきかめるのが困難であり、結局信頼のおける農家をさがすしかないということ、また買うという立場だけで関係を考えているだけではだめで、生産・流通・消費という構造の中でとらえようということばです。さらにこのことは、農業のベースになる、水と土等の環境を守る、農業自体を守る、さらには穀物の国際戦略の問題と大根1本から様々にからみあった構造へと向かいます。

運動の視点がここまで深まった時、第三世界の問題もおのずと自分たちの問題として、浮かび上がってきます。何を求めて生活(運動)をしているのか、何故問題が発生したのか、見えにくくなっている問題の本質をイメージできるかが運動の質を変えていきます。

中部リサイクルのイメージのしかた

私たちは「食える市民運動」をめざしています。これは、ただ運動をしながら食えれば良いということだけでなく、人間の生活=働くことである。食う=生活である。生活の営みの源として食うことがあ

ると考えているからです。誰もが生きるためには食えることから逃れられません。そのために働きます。その働き方のまちがいが社会の矛盾をひきおこしているのではないのでしょうか。

今の社会の矛盾はひとりひとりの人間の行動から始まり、分業化などでそれぞれの手からすべてが遊離し、社会構造をつくって見えにくくなっていく。このことを自覚し、加害者であることをやめようとする。だから働く=食うことにこだわります。それがエコロジカルに生きる=働くことだろうと考えています。

自分から、生活から、できるところから始まるのですが、ひとりではやる限界があります。そこで加害者になることをやめた人たちがつながる必然がでます。それが運動なんでしょう。最近様々なジャンルの団体が、自分たちだけの運動に限界を感じ、つながりをもちはじめています。日本ネグロスキャンペーン委員会という団体は協賛共同購入会と手を結び、食と第三世界の運動をつなぎました。これが、ネグロス島の人たちとの「黒砂糖」の草の根貿易として実現しています。

私たち中部リサイクルも関わっているのですが、それぞれの団体が自分たちを生かしつつ、自分たちのワクを超え、それぞれの運動のちがいを認め、力を出し合っています。今後このようなかたちで、加害者になることをやめ、構造を変えていこうとする様々の団体が第三世界を視野に入れ活動を展開することは必然となるでしょう。



◀中部リサイクルの機関誌
リサイクル情報ばかりでなく自分たちのくらしの中身も考える



▲第3世界ショップと
ネグロス島の砂糖▶



私は日本のおかあさん

行 方 百合子

昨年9月26日、東金市の松之郷ぶどう園で「地域からの国際交流・海外協力をめざす——ぶどうだなの下のシンポジウム」が開かれた。これには山武ボランティア協会をはじめとする地元東金の人々や、ホームスティするために訪れていたアジア各国からの留学生が参加した。

パネラーには国際交流やアジア問題の専門家が招かれたが、なかでもベトナム難民の青年たちから“おかあさん”と呼ばれている行方百合子さんの話は大きな反響を呼んだ。行方さんの話は数日後の朝日新聞「天声人語」にも、市民の中から生まれた国際交流として紹介された。

トゥエン君との出会い

私は一介の主婦です。家庭と職場を行ったり来たりで、今日のテーマである“国際化”とか、“海外協力”には縁のまったくなかった1人の主婦でございます。で、主婦としても夫に言わせると20点ぐらいしか点数をもらえません。パチンコにあけくれたり、優越感、挫折感にふりまわされるような生活をしておりました。

そんなある日、日本にいる難民の人たちを80人東金に迎えるのだけれど、山武ボランティアの人の家だけではとても足りないの、ホームスティの受け入れ先になってくれないかというお話がありました。1晩ぐらいならということで、私は引き受けることにしたのです。本当に簡単に、問題意識も何もなくお引き受けしました。

そしてその晩に来たのは、29歳のベトナム人のホーム・トゥルン・トゥエン君という男性で、とてもスマートでハンサムで、1ぺんで気に入りました。彼はそれ以来今日まで私をずーっとおかあさんと呼んでくれています。私は自分にも1人子供がおりますが、自分の子供と同じように彼も我が子だと思っています。これは断言できます。そういう心の交流といましようか、触れあい1年間以上続いたわけですね。

それで今日は、なぜそんな風になったのかお話ししてみたいと思います。これまで国際化などということはまったく関係がなかったのですが、難民の青年を受け入れることで、アジアの文化を知ったり、あるいはそういう人の苦しみ、悲しみをいっしょに考えるようになり、私自身が変わっていくことで将来平和につながるのではないかとということまで考えるようになったんですね。人生観がまったく変わったんじゃないかとも言われるんですが。

まず彼が泊った夜のこと、非常に大きな感動を得ました。何のごちそうもしませんでした、皆と食卓を囲みましてね。「あなたはとても悲しい思いをしたでしょう」という質問をぶつけたわけです。「あなたは難民だったというけれど、難民というのはどうも私は嫌いです」「何か困難な民族だという印象があって、言葉自体が嫌いですが、あなた自身はどう受けとめていますか」といきなり聞いたのです。すると彼は「僕は人間だし、難民でちっとも恥ではないし、堂々と難民だと言えます」と言いました。それには深く感動しました。なんて自分は浅はかなことを聞いたのだらうと思いました。続けて私は「あなたがポートピープルで逃げてくる前にお母さんとの別れがあったのです。弟さんはベトナムにいるそうですが、あなたは非常に悲しい思いをしたのですね」「お母さんは泣いておられましたか」と言いました。お母さんは泣いていたというので、「あなたも泣いたでしょ」と思わず言ってしまいました。これは日本人的な感覚で、本当に私だったら泣いて離れなかったと思うのです。今の日本人の親離れ、子離れしない親子関係を思い、ちょっと聞いてみたのです。

彼はこう言いました。「もちろんお母さんは泣いていました。でも僕は泣きませんでした。最高の笑顔を作ってきました」「泣くことはとても簡単です。今から105人が全長15mの船に乗って、助かるかもしれないし、海の底に沈んでしまうかもしれない……。僕は多分70%助からないと思っていましたから、最

後の親孝行のプレゼントは僕の笑顔だと思いました。もし2度と笑顔を見せることができなかつたら、海の底に沈んで本当に笑うことができなくなったら、その後お母さんに一生僕の泣き顔をイメージづけることになってしまい、それはつらい」と。

彼はクリスチャンということでしたから特に親しいのかなという気もしましたが、その優しさと強さ——本当にこれから死ぬかもしれないという極限状態に立った時に、一生懸命最高の笑顔を作り母親にプレゼントしてきたという——これにはもうびっくりしてしまいました。何と心の優しい、そして冷静に判断するしんの強さかと、日本人にはない心を感じ、また見た様な気がしました。

その時ですね、本当に彼が生き生きして見えそうですね。日本の男性も負けられない、なんて気がしたんですね。実は私には20歳になる大学生の息子がおります。わがままもいますし、トゥエン君とは比較になりませんが、彼がお兄さんになってくれたらいいなと思っていました。

その彼が最後にベトナムから脱出し、次第にベトナムが視界から遠ざかり、やがて山が消えたそうです。その時に山の上にお母さんの顔を重ねたといいます。そして思いきり泣きました。彼は「これからの人生に僕は苦しみも悲しみも全部捨てようと思った。僕は泣いてこれからの人生に立ち向かおうとした。もちろんこの時は絶望の方が大きかったけれど、もし、生きて自由が手に入るのなら僕は絶対に泣かないとその時決断した」と言っています。

自分自身の価値観が変わる

彼の言葉はショックでした。ショックというより感動でした。もうすっかり彼を気に入りました。それ以後彼は私のことをおかあさんと呼んでくれます。私も本当に自分の子供の様に毎日話しました。ほとんど毎日電話が来まして、日本語もだんだんじょうずになっていきました。その中で彼はこんなことも言ったのです。日本人は本当に親切だ。でもその親切は2回までだって言うんです。2回は本当に親切なんですって。3回になったら下を向いて、4回目になったら戸を閉めるって言うんですね。これは日本人にとって恥ずかしいことだなと思ったのですが、こと周りを見回してみると日本人である私でさえ感じます。ああ、そういう側面がたしかにあると

思うんですね。

このような指摘を聞きながら私は彼のいう事の重味というか、心のあり方、あるいは物の見方、価値観のとらえ方を通して、だんだん自分自身が変わっていくのを感じました。たとえばパチンコのネオンサインですが、あのキンキラキンの明かりを資源の無駄であると思うようになったことです。今までは希望の光だと思っていました。これまで通っただけですぐ入りたかった私が、そのネオンサインを無駄とを感じるようになってしまったのです。パチンコ屋に入った途端に軍艦マーチが勢よくとびこndきますが、戦争を思い出して、1年生でしたけど、軍艦マーチなんて聞きたくない。今では私たちは耳をふさがなくてはいけないと思うほどになったのです。そんな事が続いて今日は勝とう、もうけようと思ってやっていたのが、今はただの雑音でしかなくなりました。いかに健康を害しているかということに気がついたわけです。

私ももしトゥエン君と出会わなければ、未だにその価値観も変わることなく、本当にただの主婦で一生を終ったかもしれません。こう思った時、とても大切な機会を与えて下さったボランティアの皆様本当に感謝したいと思います。よい人に巡り会えてよかったと思います。

今では彼だけでなく、彼の友人たちも私のことをおかあさんと呼びます。彼らの多くは平和島にいます。あの辺は工業地帯で、社長さんたちも理解のある人が多いそうです。品川区には難民救援センターがあるので、あのあたりに皆さん就職しているようです。そこから都合をつけて私の職場まで顔を見せに来てくれるのです。年中行ったり来たりしています。

ある時そのなかの1人から就職の保証人になってくれないかと電話がかかってきました。保証人は日本人でなくてはダメなのだそうです。その時に住宅の保証人にもなって下さいということでしたので、ああいいですよといって引き受けました。その事によって彼は経済力をきちんと身につけることができ、暖い家庭を営んでいるわけですね。そんな時、これが国際化とか国際協力じゃないのかな。意外と大した事をやっているのかなと、ちょっと思うようになったのです。彼らが本当に幸せに生きるということは私自身が幸せでもあるし、これからそういう関わりを広げていきたいと思っています。

素晴しくもなく、気安めでもなく

難民と地球の緑を考える会 小島淑子

つい先だったのこと、当会の活動について話していたら「素晴らしいことをやっていますね」と言われた。面くらって慌てて打ち消したら、「では、気安めですか？」と切りこまれた。もちろん気安めのつもりではない。どんなにささやかな活動だろうと、ひとつのことを始めて継続してゆこうとなれば、気安めだけでできるものではない。

「素晴しさ」と「気安め」の中間あたりがうちの会だと私は答えた。まだ会に入って間もないお金だけ送ってくるその人が、私の答えに満足してくれたかどうかはわからない。が、私はいろいろ考えさせられてしまった。

会を始めてから、いろいろな評価を聞かされた。選挙に出るつもりか、とか、もっとほかのことでやらなくちゃならないことがあるのではないかと、とか。選挙というのは論外としても「もっとほかのこと」というのには、「どうかあなたの目に入ったことは、あなたご自身でして下さい」と答えることにしている。誰であれ、出来ることは限られているから、それぞれでやってゆくより仕方がない。

そんな会話が生れるのも、まだこの社会では市民活動というのが身についた衣ではない証拠である。良くも悪くも「特別なこと」なのだ。しかし私も会を始めるまではそうだったから、他人のことは言えないが。

会のきっかけは『人間の大地』（犬養道子著 中央公論社）だった。飢え・難民問題を中心テーマにすえたその本を読んで、あまりの内容に居てもたってもいられなくなった私は、手当たりしだいの人にこの本を読んでくれと呼びかけた。この本だけは回し読みにしなさい、自費で買って読んで下さいと。

やがて、自分たちも何かやれることをやろうという声が、読んでくれた人から上がってきた。その結果生まれたのがこの会である。84年6月、ほとんどが子供を抱え仕事もしている主婦だった。その後は朝日新聞の声欄に投稿が載り、それを契機に入会してくれた人たちもあり、今では男性、学生たちも加わっている。が、中心メンバーはやはり主婦である。

子供を持って働いて、となれば、まず時間のなさが共通項となる。月に1度、第1土曜日夜の定例会

さえ出席がままならない。子供が熱を出したり、PTAの集まりと重なったり、仕事が延びたりと。私にしる小さな商売をしているので、日曜、祭日は休めないし、気を抜くとすぐ売り上げが落ちて国内難民になりかねない。

そういう前提条件のなか、出来ることは何か——これが当初からの命題だった。大金を動かすことは無理、時間や労力もたくさんはダメ。しかし、少しずつのお金を持ちより、日本のNGOの活動に参加することならできる、となった。そして、JVCとの接点生まれ、後には日本フォスター・プラン協会——精神里親制度、ネグロスキャンペーン委員会などにも参加してきた。

発足当時はアフリカ飢餓の真最中だった。事態の深刻さに肝をつぶしながら、私たちのアフリカ飢餓への関り方は、JVCのソマリア農場プロジェクトにしようとした。

海を越え、手弁当で働いている無名の若者たち、JVCへの賛同でもあった。日本の将来につながる明かりだと思ったし、その灯を消してはならぬという思いもあった。

学習としては、定例会での勉強や講演会などを行っている。講演会では難民問題をテーマに、アジア・アフリカ・中南米とようやく一巡したところ。

記録の点では月報『路』と会誌『旅立ち』がある。『旅立ち』は年3回の発行だが、難民問題に限らず、広く、市民活動や意見交換の場になってきた。読みものとしてもなかなかのモノだと大いに自負している。（ご希望の方は0423(77)9775まで）

こうして3年半、一応の形は整ってきた。残るのは、これでいいのか、という思いだけである。活動が間接的なものに止まっていることに対しての後めたさとも言おうか。難民問題を標榜していても、例えば私たちは日本在住の定住難民との関りさえ持っていない。その意味でJVCの日本語教師派遣事業には敬服させられている。

しかし私たちがこれ以上手を広げることは今は無理。ならば、素晴らしいとは言えず、さりとて気安めでもないという会の状態は当分続いてゆくことになるだろうと思っている。

仙台で「マツミー展」を

手織物を通してタイ農村とつながる500人の会 キム スンヨル

去る11月29日、“手織物を通してタイ農村とつながる500人の会仙台グループ”と“アジアフォーラム仙台”との共催で、「マツミー展」(タイシルクによる緋織り)が仙台の目抜き通り、141ビル・ギャラリーホールで開かれました。

マツミープロジェクトとは、タイ東北部に位置するソン・ホン村が、500人の会とATA(タイ適性技術協会)との協力で慢性的干ばつや洪水による貧困から、自立の村への足がかりとして、伝統の織物(マツミー)を復元させることによって村おこしをしようというものです。

私たちはこのプロジェクトに関わる中で、何度かタイを訪れ、心暖まる歓迎を受けてきたのですが、タイの村から人をお呼びすることはありませんでした。つまり、日本側の一方通行で、タイの人にとっては、日本がどんな国なのか、タイをどのように見、マツミーをどのように評価しているのか、まったくわからないのです。お互いを認めあいながら両方の対等な関係を作りあげていくためには対面通行でなければならない。そんな思いがつのり、仙台グループ3人の発案で、タイから人をお呼びし、マツミー展を日本のイサーン(東北)仙台でやろうという運びになりました。

初めは「ささやかでも」だったのが、夢はどんどんふくらみ、予算は60万円にまでなりました。もう赤字は必至でした。人口70万の中都市で、どのように市民に関心を持ってもらえるか、ふだんはアジアなどエスニックブームの時以外には意識にも上ってこない人々をどのようにひきつけるか、まったくつかめませんでした。

たった1日の催しの中に、講演あり、展示あり、スライド上映あり、パーティありの盛り沢山。どのような会場セッティングにするか、進行技術は、と頭の痛いことは多々ありましたが、とにかくやるしかないという思いでした。

こまめに歩いたマスコミの影響力は大きなものでした。各新聞社、放送局、情報誌等々、メディアの威力は大きいと痛感しました。幸せなことに、いろいろな分野で活躍中の人々の協力(ハガキデザイン、料理、展示セッティング、照明、抽送用小荷物作り、菓子、器、等々)も多大でした。200人分を用意したパーティ料理はまたたく間になくなり、スタッフ一同一口も口にできませんでした。結果として、パフォーマンス的なイベントに終わったくらいはありましたが、アジアを知るきっかけ作りになったことだけは間違いない、と思っています。

私たちがアジアにこだわり、タイの村おこしにかかわること “共に生きる” ということの “自分おこし” の問題であり、“生き方” の問題として考えるからです。アジアに関わることは軍靴の代わりの経済侵略になったり、強国の論理による大義名文であったり、国際世論をかわすためのお義理であったり、いわんや可哀そうな人々へのお恵みであってはいけない。“顔の見える”，“ゆるやかな”，“続く関係”，“心の通う” ものであってほしいと思うのです。

●年に一度このようなアジア展を開いてほしいとの声を多々聞きましたが――さて。今会計をメています。黒字になることを祈っています。



▲林さんの講演会には100人もの人々が集った(山形)

◀仙台で行われたマツミー展のパーティ

コーヒー一杯運動から

トウリー・フォー・ライフの会 武田節子

蔵王の山々が白く雪化粧し始めました。山形の地より、JVCの会員の皆様に初めてお便りさせていただきます。私たちのトゥリー・フォー・ライフの会は今から3年ほど前、犬養道子さんの『人間の大地』を読んだのがきっかけで生まれました。

最初に6人の主婦が集まりました。自分たちがあまりにも世界の事を知らないのです、いろいろな事を学び合いながら何か自分たちにできることをやってみようじゃないかということになったのです。現在会員は140名ほどに増え、JVCの支援団体として、毎月「コーヒー杯運動」をやりながら、アジアやアフリカの事について学ばせていただいております。

「コーヒー一杯運動」というのは、『人間の大地』に書いてある「スプーン一杯運動」にヒントを得たものです。会員が毎月コーヒー一杯分を節約して、恵まれない人たちへ送金しながら、地球上の出来事について広く見つめ、深く考えることを目的としております。周囲の友人や職場の人たちに呼びかけていくうち、次第に仲間が増え、現在の人数になりました。肩ひじをはらずに長く続けていくことに意義があるのでは、という会員の意志とせっせと毎月会費を届けてくれる会員の方々に支えられて、毎月5万から7万ほどのお金が確実に事務局に集ってきております。

このお金はJVCを通して、タイのスラムの子供たちとエチオピアの植林に使っていただいております。会では毎月手書きの会報を出して、JVCの活動の報告をしたり、年に1度は現地のボランティアの方に山形まで来ていただいて講演会を開いています。そして募金がどのように使われているのか会員の皆さんに直接知らせるようにしております。

今年には10月にエチオピアのスタッフだった林達雄さんに来ていただき、講演会には100人ほどの人たちが集まりました。昨年はタイから佐藤正喜さんに来ていただいて、スラムの子供たちや井戸掘りのスライドを見せていただきました。

地方都市に住む私たちには情報が入りにくく、何かやりたいと思ってもなかなか立ち上がることができないのですが、JVCのやり方はその点非常に理解

しやすく、とてもよいボランティアの衆だと思います。会員のほとんどが主婦なので政治やイデオロギーの知識はあまりありません。ただこの地球上で1人でも多くの人が幸せになってほしいという願いがあるだけです。その私たちの願いを現地に伝えて下さっているJVCのスタッフの方々には心から感謝しております。

運動を始めて3年経ち、今年の講演会の折には、地元の新聞やラジオにも大きく取り上げていただくことができました。いろいろな方面の方々が林さんのお話を聞きに来て下さり、大きな反響がありました。タイの留学生の方との交流もできました。コーヒー一杯分のお金で何になるのだろうと内心思っていた会員の方々も、映画に映し出された場面を見て、はっきりした形で役に立っていくのだと実感できてとても喜んでおります。

そして地方都市で、自分自身にできる事があったら、やっぱり歩み出してみなくてはならないと知り始めております。今はただ募金などの形でしか運動ができませんが、しだいにもっと自覚ができて、ボランティアのスタッフなどを送り出せる様になれたらと願っております。ボランティアの問題に限らず、地方都市に住む者が都会の風潮に押し流されず、自分の立つべき所をしっかりと知り、どう生きていくべきかを知ることにもつながっているといえます。自分の住んでいる地を心から愛し、理解できた時、はじめて他者への深い理解と愛に目覚めることができるのではないのでしょうか。

トゥリー・フォー・ライフの会がどのようになっていくのかわかりませんが、JVCとともに肩をはらず、日常生活の中で息の長い活動を続けていきたいものです。その中で、新しい方向性が見えてくるように思います。

将来、日本の地方都市と他の国の地方都市の間で交流が生まれ、やがて相互理解を深めながら助け合っていくことができれば、本当の国際交流が生まれてくるように思われます。私たちはすぐ近くの人とも遠い他国の人とも全く同じく、その喜びを喜びとし、その痛みを痛みとして感じてゆきたいものです。

NGOを訪ねて

PHD協会

〒650 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL (078) 351-4892

神戸の元町の商店街のまん中にPHD協会のオフィスはあった。ドアを開けると主事の藤野さんがにこやかな関西弁で迎え入れてくれた。

昨年引越したばかりのオフィスは自然光が入らないのが難点だそうだが、なかなかきれいに整頓されていて、どこかの編集室のような雑然とした我がJVCオフィスと思わず比較してしまった。

PHDというと何かの薬品のようであるが、これはPeace(平和づくり), Health(健康づくり), Human Development(人材づくり)の頭文字を合わせたもの。この運動はもともとネパールや東南アジアで医療活動を続けておられる岩村昇博士の提唱によって始められた。岩村博士は今まで自分のために使ってきた力の10パーセントを途上国の人々に捧げようといわれた。「それぞれにできる時間と技能と財の提供を！」は運動のスローガンにもなっている。PHD運動は今年で8年目を迎え、地元の兵庫県では地域にしっかり根づいている。

藤野さんによると、運動の柱は2つあるという。1つは海外から研修生を招き、村のリーダーとなる人材を日本の各地域の中で育成することである。具体的には農林業、漁業、保健衛生、指圧、裁縫など生活改善につながる技術と村人と協力して村づくりを進めていくためのリーダーシップを、各地で家庭滞在を中心に研修する。現地に戻ってからすぐに役に立つであろう技術だ。これまでにネパール、フィリピン、タイ、スリランカ、インドネシアなどから22人が研修を受け、3人が滞在中である。研修期間は1年間であるが、彼らが帰国してから原則として4年間は日本からの助言や現地訪問を通してフォローアップする。

大量にものを持ちこむ援助は一時的な解決にしかならず、時としては害になることもある。押しつけを避け、その地域に住む人々が自分たちで解決するために側面から協力するのがPHDの基本姿勢だという。

2つ目の柱は受け入れた研修生を通して日本人の生活のありようを見直し、変えていくことである。つまり彼らは研修生であるのと同時に先生でもあるわけだ。PHD協会はこの運動と地域のつなぎだという。

研修生の人選はまずPHD協会とつながりのある海外の福祉団体、農村開発を進める団体などが地域のリーダーとなるのにふさわしい、実践活動家を推薦する。そして既に日本で研修生を受け入れている人たちが現地に出かけていって面接する。1つの地域から4年ないし5年継続して受け入れる。さらに相手国から研修生を受け入れるばかりでなく、研修生を送り出した村へ今度は日本からスタディツアーにでかける。行政も巻きこんで地域ぐるみのおつきあいにまで発展している。これはPHD運動のとてもユニークなところだ。行政主導型の“国際化”の逆の流れである。

PHD協会から発行されている『KOBE発アジア』に、最初の研修生を受け入れることになった渡辺省悟さんの文章が載っている。渡辺さんは生産性をあまりにも重要視した農業への反省から、「物心ともに豊かな生活」を目指して、手飼い養鶏、有機農業にきりかえた。やがて同じような考えをする人々が集まり、「たんば農文塾」を作る。そこにPHD運動の第1期生が研修に訪れることになった。

渡辺さんはその青年からいろいろなことを学んだ。にわとりの飼料であるトウモロコシや麦はネパールでは人間の食糧である。ビタミン補給などにしか考えていなかった青菜を飼料として見直すようになった。またネパールでは煮たき用のマキでさえ一日がかりで取りに行かなければならない。日本では木が余っているのに燃料は石油を使う。渡辺さんは燃料をすべてマキに切りかえた。労力はいるが出費がなくなり、山の管理も行き届くようになったという。

1人の青年の具体的な行動、あるいは卒直な感想によってアジアと日本の関係がより鮮明になっていくのがわかる。私たちの豊かさはアジアの貧しさとうらはらで、その豊かさ単にものがあふれているに過ぎないことが。

彼らを受け入れた家庭や地域に強烈なインパクトを与え、彼らはまた母国に帰っていく。今まで研修に訪れた22人の消息は全部わかっているという藤野さんの言葉には、自分たちの運動に対する自信のようなものを感じた。着実な歩みによって会員もすでに3600人を越えた。運動の黒子に徹するPHD協会に私たちも学ぶところが多いのではないだろうか。

私と就職とカエルの 三角関係

長谷川 勉



1987年8月25日、タイの井戸ポンプ修理プロジェクト2次隊として参加するため、立教大学4年の私と、もう2人の学生ボランティアは飛行機に乗りこんでいた。私の友人たちは、ちょうどこのシーズンは就職活動の最中で、スーツを着て忙しく歩き回っている時だった。

誰にとってもそうであろうが、私にとっての就職も人生における一大ページェントであり、それだけに安易にどの会社でもよいというふうに妥協したくなかった。しっかり頭の中を整理して、自分のやりたい事は何なのか？ 社会にどう関わればよいのか？ 自分にしかできないことは何で、社会は私に何を求めているのか？ この4年間私が捜していた答はまだでていなかった。以前から発展途上国、とりわけ東南アジアに興味があり、大学で南北問題を専攻している私はこの井戸ポンプ修理プロジェクトの話聞いて躊躇せず申し込んだ。

我々学生ボランティアの仕事は、それほどきついものではなかった。が、タイの暑い気候と食べ物や水に体が慣れるまでの一週間は地獄の日々が続いた。体がカルチャーショックを受けたのだろう。体力には自信のあった私だが、腹の中はいつも超特急。くだりっぱなしでティッシュはどこへ行くにも手放せなかった。作業中に便意を催し「トイレはどこですか？」と村人に聞くとにっこり笑って「どこでも好きな所でおやりなさい」と言われた。私は顔では愛想を振りまいて平静を装いながらも、全速力で近くの草むらの中に消えた。

また、ある村では作業終了後に昼食を御馳走になったことがあった。タイ特有の質素な高床式の家だった。家の中には家具らしきものはなく、炊事道具の鍋や皿がいくつか目に入る程度だった。外はスコールになり、電気がない家の中は午後2時すぎにもかかわらず真っ暗だった。貧困層が多く住むこの地域（イサーン）の人はいったい何を食べているのだ

ろう？ とワクワクする私の前に出されたものは……なんと驚き、カエルだった。体長8センチほどのカエルを火であぶった「炭火焼」が20匹ぐらい。それに手足をひきちぎりバラバラにして水で煮た「煮込み」、その2つがおかずだった。そして山盛りのごはん。やめてくれ、俺は食えんと言いたかった。しかし、タイ人一家全員が私に注目していた。「食べるのか、食べないのか？」さらに「お前は俺達の仲間なのか、ただの外人か？」と問うているような目だ。私は決心した。食べるしかない。カエルの顔を見ていると食欲が減退するので、なるべくそれを見ずに食べた。とにかく、胃の中にごはんと必要最低限のおかず（カエル）を一緒に流しこむことに集中した。

そういったたくさんの興味深い経験を重ねながら、我々は全部で10余りの村を回った。どの村もカンブチアの国境に近く、しばしば戦闘がある危険地帯だ。実際、我々が作業している間も幾度か砲声が聞こえてきた。村のあちこちには土を盛ったシェルターが目についた。一つの村には平均3つの井戸があった。学生ボランティアは資材の運搬やタイ人技術者の作業補助が主な仕事だった。JVCの井戸給水プロジェクトは1982年に始まってから、もうすでに5年が経っており、当時据え付けられた旧型ポンプのほとんどは老朽化し壊れていた。旧型ポンプ（鉄製・鋳型製）の欠点は、①高価 ②重い（セッティングや修理が困難）③農民自身で修理できない（特別の道具が必要）、ことである。一方今回取りつけた、タイ中間技術協会が開発したポンプは値段が旧型の1/6ぐらいと安い。そして村人でも修理が簡単にできるような塩化ビニール製のねじこみ式である。なるべく村人にポンプの構造を覚えてもらうため、必要最低限の説明のみで、実際の作業は村人自身の手で行ってもらった。こうすれば、もしポンプのどこかが壊れても、村人だけで再び直せるからである。

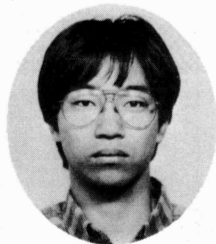
私たちが訪問した村は、どこも貧しかった。人々の生活は厳しく、圧倒的な力を持つ自然の前にひれふすしかない。さらに加えて、いつ飛んでくるかわからない砲撃の恐怖が絶えずのしかかっている。そうした日本では考えられないような悪条件の下でも、必死に生きようとする人々がいた。このプロジェクトを通して、自分の力ではどうにもできず常に声なき叫びをあげている第三世界の人々に、ますます私はひきよせられた。



井戸修理ワークキャンプに参加して

熱で過ごした ワークキャンプ

瀬口 圭司



外から町の雑踏が聞こえてくる。ボーッとした頭の中でそれを聞き流している。そっと目を開けて天井を見ると、飛行機のプロペラのような大きな扇風機。ここはタイ東北部スリンにあるホテルの1室である。私は熱を出してダウンしてしまっていた。

8月29日、ポンプ修理を行う村の下見に行ったところ、少々疲れが出たらしく、頭痛があり、とにかく眠かった。30日（この日からタイの風邪の恐ろしさを思い知らされることになった）、朝起きてみると体がだるく明らかに風邪の症状だった。とにかくこの状態ではポンプ修理などという、肉体労働は不可能であると判断し、当日の作業への参加は辞退。ホテルでおとなしくしていることにした。

作業へと出発するみんなを見送った後ホテルの部屋に戻り、日本から持参した抗生物質を飲み、ベッドに横になった。とにかくものすごく寒い。布団（南国タイのことなので、薄ペラなものしかない）を被ってもまだ寒い。しかたがないので同室の大沢君のベッドの布団も借りたがそれでも悪感が出た。それから大量の汗をかけた。1度汗をかくと下着からTシャツ、ズボンまでベタベタ。まるで雨にでも降られたかのような。乾いた服に着替えても熱が下がるところか、またまた汗が大量に出て、着ているものすべてがずぶ濡れになってしまった。

翌31日、カモン氏にホテルの近くの医者へ連れていってもらい、診察を受けた。医者のお話では3、4日休んでいればよくなるだろうとのことだった。薬を出してくれたが、これがなんとバカでかいカプセルで（私の持参した抗生物質の倍はある）、さらに青と黒という凶悪なカラーリングなのだ。一見して、大丈夫かな、こんなのを飲んでという不安が心の中をよぎった。

しかしながらこの薬はなかなか良く効いて、夕方には熱も下がり、ある程度食欲も出てパンとコーヒーを腹の中に入れることができた。30日の朝から食

事をほとんどとっておらず、これが2日ぶりに食べたまともな食事だった。

9月1日も体調は芳しくなくホテルで横になっていた。2日にはポンプ修理に参加した。ほとんど作業を見ているだけだったにもかかわらず、かなり疲れてしまった。そしてこれ以上みんなと同行することは不可能だと考え、3日に1人バンコクに引き返した。

その後10日ほどバンコクで過ごした後、予定より1週間ほど早く日本に帰った。

今回の教訓として自分の体力を過信してはいけないということです。熱い地方での体力の消耗は想像以上に激しく、どんなに体力に自信があっても20%ぐらいは体力を残して行動するのが鉄則であると教えられました。

最後にタイJVCのカモン氏、柴田氏他たくさんの方々に御迷惑をおかけしたことを、深く反省するだけです。

井戸修理ワークキャンプに参加して

タイの僕に 少しだけ嫉妬

大沢 剛史



「タイの下痢は強力だなあ」。バンコクの朝、パンツを洗濯しながら僕は実感していました。8月28日、スリンに向けて出発する日でした。

僕はその日の夕暮れをランドクルーザーの荷台で迎えました。視界には今来た道が、スコールで濡れながら真すぐに続いていました。

スリンでの毎日は幸せでした。街も村も魅力的でした。僕は毎日ワクワクしていました。下痢はしても心は錦でした。僕にはもったいない毎日でした。「タイにいられるのならなんでもいい」。いつか誰かに聞いたこの言葉は今の僕の気持ちに重なりました。

タイでの僕の時間はあっという間に過ぎてしまい、今、僕は日本に居ます。そしてこの日本にいる僕はタイにいた頃の僕に少しだけ嫉妬しています。

JVCNEWS

マレーシア大量逮捕とその後

マレーシアはアジアの中でも市民運動が活発で、マレーシア地球の友やペナン消費者協会はそのリーダー的存在であった。ところが昨年の10月から11月にかけて政治家、市民団体の関係者、宗教家など、106人にも及ぶ人々が国内治安法 (ISA) によって次々と逮捕された。マハティール首相は国内の人種の緊張が高まり、暴動が起こるのを未然に防ぐためと述べているが、マレーシアの「国内治安法関連拘束者を支援する会」によれば大量逮捕の背景を以下のように分析している。

- ① 与党連合の主要政党である統一マレー国民機構 (UMNO) 内での首長選挙に、マハティール陣営は不正があったとし訴えられており、もしマハティール首相が裁判に負ければ彼は今の地位を失う。
- ② マレーシア南北ハイウェイ工事に汚職の疑いがあり警察が調査中である。この中には首相、財務長官の名前も上がっている。
- ③ アジア・レア・アース社 (三菱化成系) の放射性廃棄物集積所の建設は住民の反対によって停止された。住民らはさらに「ベラク放射能委員会」を結成したが、今回の逮捕者の中にはこの運動に参加していた主要メンバーが含まれている。
- ④ 連邦憲法は抑圧的な諸法令のため各界から見直しを求める声が上がっていたが、首相はこの動きを「人種主義的なもの」と決めつけた。
- ⑤ マラヤ大学の評議会は1部の選択科目に母国語で教えるコースを除外すると裁定した。これに学生グループや政党が反対していた。
- ⑥ 中国系小学校に中国語を話せない校長を任命した。このことは中国人の反発を招いた。マレー系のUMNOの幹部たちは先の決定に反発した中国人を「国の安定を損ない、マレー人優先の憲法を問題にしている」と非難した。
- ⑦ 過去2年間にわたり輸出主要産品 (ゴム、スズ、石油、木材 etc.) の下落のためマレーシア経済は悪化してきている。

このような状況から「国内治安法関連拘束者を支援する会」では、この大量逮捕の理由として、



マレーシア大使館前での抗議行動 (12月10日)

- ・マハティール個人の権力は危うくなっており、実際にはきわめて弱い。この拘留は彼自身の党内の反対派を押しつぶすことが主目的。
 - ・それに続いて野党や非政府組織、個人におけるあらゆる形の異義申し立ての力を奪いとること。
- この2点を挙げている。

106人にも及ぶ逮捕に加え、政府は「スター」をはじめとする新聞3紙も発禁し、厳しい言論統制をしている。

このニュースはまたたくまに世界中に広まり、各地から抗議の声が上がった。日本でもアジア太平洋資料センター、熱帯林行動ネットワークを中心に10月31日「マレーシア大量逮捕を憂慮する会」が結成され、JVCもそのメンバーに加わった。11月10日には緊急集会が開かれ、現在参加団体は16を数える。その際緊急署名を呼びかけたところ、1600人の署名が集まり、12月10日に会の竹内直一代表らがマレーシアのチュー公使に手渡した。

12月31日の時点では55人が釈放され、2人が追放、8人が条件付釈放、33人が拘留中とある。33人の名前についてはまだ未確認であるが、現地の支援グループなどに問い合わせ中である。

「憂慮する会」では、2月20日 (土)、午後1時～5時、千駄ヶ谷区民会館において“マレーシア大量逮捕を憂慮する2.20集会”を開く。これまでの経過報告、調査団の現地報告、マレーシア航空ボイコットの呼びかけ (3月1～5日は抗議行動) を予定している。

※資料集 (300円) のお問合せは
熱帯林行動ネットワーク
(03-770-6308) まで

国土庁と東京弁護士会から表彰

暮れもおし迫った12月10日、国土庁より全国の各地域から推薦された福祉団体とともにJVCも東京都から推薦され、国際居住年における功労賞が贈られた。これは主にタイ、スラムでの生活改善などの活動に対して与えられたものと思われる。

明けて1月8日、これまでのJVCの活動全般に対して東京弁護士会人権賞が贈られた。なおこの人権賞には30年間も婦人相談員を続けておられる兼松左

知子さん、自衛隊違憲訴訟で知られる弁護士の渡辺良夫さんも表彰された。

「お二人の経歴に比べてJVCは歴史も浅く、まだこのような賞をいただける力はないのですが、これを励みにさらに活動を充実させたいと思います」と、あいさつに立った事務局次長の熊岡路矢は述べている。こつこつと地味な活動を長年続けておられる方に混じってこのような賞をいただくのはおこがましいような気もするが、気持ちを引きしめる上でもさいさきのよい88年のスタートであった。

「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム」参加者募集

JVCが「難民」を主要な対象として海外で協力活動を行っているように、現在さまざまな領域で国際交流や海外協力が行われてきています。そうした社会の動きに対応して、神奈川県でNGO(海外協力をおこなう非営利民間団体)や一般の市民により、国際フォーラムの開催を準備しています。

このフォーラムではアジアからも5人の参加者を招き、市民による海外協力をどのように行うか、どうしたらNGO活動を活性化することができるかなどをテーマに討論を行います。従来国際会議というと、数人のパネラーの話を一般参加者はただ聞いているだけという形が多かったのですが、今回のフォーラムでは具体的な討論テーマに分かれ、1分科会20人程度で参加者全員が充分に語り合えるよう、分科会を中心とした企画にしています。

フォーラムは、JVCをはじめシャプラニール、アジア協会・アジア友の会、CCWA(国際精神里親伝道部)などのNGOや神奈川県内のグループ、市民によって構成された「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム実行委員会」によって企画運営されています。実行委員長には、JVCの星野事務局長がなっており、JVC神奈川も事務局の一員として参加しています。

フォーラムのプログラムの中には、アジアの音楽を流したり、ビデオやパネルによるアジアの紹介など、盛りだくさんの企画を考えています。どうぞ、気軽にご参加ください。

参加ご希望の方は、下記フォーラム実行委員会事務局までご連絡下さい。募集要綱をお送りいたします。

< 内 容 >

期 間：1988年3月19日(土)、20日(日)、21日(月)

会 場：アジアセンター、小田原女子短期大学(神奈川県小田原市)

おもなプログラム：

- ・ミニ・フォーラム①「海外の活動現場を知る」
- ・ミニ・フォーラム②「アジアの暮しと状況を知る」
- ・特別企画「有名人物の語る海外協力はいま」
- ・分科会「定住難民」、「熱帯林」、「スタディ・ツアー」、「開発教育」、「農村開発」、「保健・医療」、「適正技術」など16分科会

参加費：15000円(2泊3日5食付き) 日帰りも可能です。

募集期間：2月1日～2月20日(ただし、定員になりしだい〆切)

連絡先：〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易センタービル9階

(財)神奈川県国際交流協会「KIS」内

「市民とアジアをむすぶ国際フォーラム」実行委員会事務局

Tel. 045-671-7070(内線30) 山口、荻村

原 仙人

気楽さ、気安さがどこから来るのか——一つには当然小泉氏のいうように蔑視からきているのかもしれない。

さて、そろそろ何を言っているのかわけがわからなくなっていました 第三世界の問題と老人問題を同じ地平で考えてみたかったのですが、どうやら私の限界を超えたようですので、このあたりで失礼いたします。

いまじん
(今人倶楽部)

JVCプロジェクト

1987年12月25日 現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
東京本部	渉外, 事業計画, 資金調達, ボランティア調整, 会計, 総務, 情報収集および広報等。 機関誌『トライアル・アンド・エラー』発行。 JVC 説明会—毎月第1月曜日 午後6時～9時 第3土曜日 午後1時～4時 学習会 月1回 午後6時～9時 (希望者にはハガキにて連絡)	全国社会福祉協議会	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 佐々木志保, 林 達雄, 前川昌代, 鶴田三芳, 古西 勇, 富安光子, 岩崎美佐子, アイネス・バスカビル
神奈川県 (JVC 神奈川)	神奈川県内における渉外, 事業計画, 情報収集, 資金調達等を行う。 神奈川県及び県内の市民団体との共同事業の企画, 運営。定住難民プロジェクトのコーディネーション JVC 説明会—毎月第1火曜日 午後6時～9時 毎月第2土曜日 午後1時～4時		山口誠史
日本国内	●定住難民プロジェクト ●12月1日から, パナニコムで活動していた落合正幸が1988年3月末までという期限つきながら, 定住難民プロジェクトのアシスタントとして加わった。古くからこのプロジェクトに関っている落合の復帰により, 定住難民プロジェクトがより活発になることであろう。 また, 主婦ボランティアの谷本栄子が週2回神奈川オフィスに来て, 主に日本人ボランティア間の調整にあたることになった。 ●12月17日, 全体ミーティングを東京オフィスで行い, 機関誌のことを中心に話し合われた。今後機関誌については, 神奈川オフィスのボランティアを中心に編集委員を一新することが確認され, また討議の内容をふまえて『もしもし, あのね』第4号が発された。	ジャパン・タイムス 神奈川県福祉部 横浜キワニスクラブ, 全国老人クラブ連合会 国際交流ホスピタリティ・トラスト 禅林寺龍華会基金	山口誠史, 落合正幸, 谷本栄子, 他約60人
	●東金農場 東金農場の今後の展開について, 地元の支援者とJVC 代表等の話し合いが続けられている。		井本勝幸, 五十嵐裕昌, 松岡美奈子, 飯塚美奈
エチオピア (ウォロ州)	●緊急食料援助 深刻化する干ばつに対処するため, food for work を87年8月に開始した。88年2月より始める55000人を対象とする本格的食糧配給を現在準備中。被災地に少しでも近い場所で配給できるよう, 特に輸送力の確保を急いでいる。キャンペーン実施中なのでご協力を! ●総合的復興促進 - 植林 農民, 母親, 子供を対象に指導, その後家庭植林用に苗木を配布。土壌・水源保全用に植えつけを終えた。 - 保健, 栄養 家庭菜園, 離乳食の訪問形式による奨励が母親自身の手で行われつつある。地元診療所とともに母子健康相談も実施している。 - 給水 清潔な飲料水確保のため, 泉の保護をしている。種子銀行, 農業教室も引き続き行っている。	CRDA, 西本願寺, チャリティ・サイクル, メリノール修道士会, 全国老人クラブ連合会, バンド・エイド, 東京グリーン・ウォーク ジャパン・タイムス モラロジーMIRC, Tree for life の会, 栄光学園	加納 妙, 伊藤達男, 伊藤幸子, 有本敦子, 山田 盛, イエットベルク, ソロモン, バレタ, フェテルワルク, ダニエル

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
ソマリア マガネイ・キャンプ (ゲドー郡) ハルバ・キャンプ (ゲドー郡)	●農業による自立促進 現在までに、マガネイ・キャンプ周辺で74ha、ハルバ・キャンプ周辺で59haの農場建設が終了した。JVCが農場用地の獲得から建設までの全てを行う方式から、Group Farming方式に大きく移行しつつある。この新しい方式では、難民が自主的に作ったグループに対して、JVCはポンプ・農具・ディーゼル燃料を貸与するのみである。彼らグループは、2～3年以内に返金する。 ●現金収入プロジェクト かじ屋、パン屋、水屋のいずれも進行中で、パン屋が営業的に一番うまく行っている。 ●コミュニティー・サービス 焼き物及び帽子製作の2コースに加え、英語教育も始めた。先生はいずれも難民たちである。また、市場の日陰作りのためにJVCは材料を提供し、難民たち自らが作った。	UNHCR, 創価学会青年平和会議, 仏国土をつくる会	嶋 紀晶, 金子一弘 浜野敏子, シアッド, 荻ノ迫善六, 船川秀夫, 中岡哲也, 中野周二, モハメッド, ラシッド, アオキ, アブディ・ジョフ
ジャボレ・キャンプ (ヒラン郡)	前述のように、ジャボレでの活動を来年の3月(もしくは4月)で終了する決定をした。今後は、従来実施してきたプロジェクトを、その目的を極力達成するようにまとめていく。 主な活動としては、①植林: 植林区はソマリア政府の監督のもと、難民自らが続ける。7200本の苗木を配り、キャンプ内に植林する。②収入プロジェクト: 水屋は今年いっぱい、パン屋は来年4月までに返金し終わる。③スタッフ用住居施設: ソマリア政府に移管する。	朝日新聞厚生文化事業団, 砂漠に種をまく人の会 R.I. ジャパン	庄司 美, シュクリ, ハッサン, アブディ,
カンブチア (ブノンベン カンダール県 プレイベン県 スバイリエン県)	10月25日北風が吹き、雨の少なかった雨期が終った。干ばつのため、全国的に米生産の30～35%の被害が予想され、特にカンダール県、タケオ県、コンボン・スプー県、プレイベン県の4県の被害がひどい。 1. サンタピエツプ(平和)技術学校、ワーク・ショップ 主な建物の後、倉庫棟(更衣室、トイレを含む)の建設を進めている。年内に完成の予定。小型のクレーンをスタッフの手によって、熔接、製作した。日本からの自動車とかんがいポンプのスペアパーツの到着を待っている。 2. 井戸掘り/給水(OXFAMと共同) プレイベン県、スバイリエン県で続行中。 3. プレック・ビノウ孤児院援助 8月13日、男子寮の補修完成。雨漏りもなくなり非常に明るくなった。雨といも水タンクも完成し、あとはトンレサップ川からの給水と浄水システムを残すのみとなった。 4. 補助栄養給食 9月17日～24日の本田医師、古西事業担当の現地調査、交渉を経て、カンダール県ブノンベン郡での1988年度RINEセンター建設と、プログラムの担当(JVC/SHARE)が確定した。カウンターパートは保健省、ユニセフ、欧米のNGO。	全国老人クラブ連合会, 創価学会青年平和会議, モラロジーMIRC, 立正佼成会, 自動車労連, 庭野平和財団, ILCチャリティグループ, 西本願寺, 善興寺ダーナ基金, 高岡青年僧侶会	熊岡路矢, 簗田健一, 簗田玲子, 馬 清, マリー・キャマル [カウンター・パート] タック・カン, メアス・サメット, ゲット・ソーン

活 動 地 名	活 動 内 容	出 資 団 体	担 当 者
タイ バンコク事務所	渉外、事業計画、資金調達、ボランティア調整、会計、総務、情報収集および広報、バザー、古本のセール。季刊『ニュース・レター』（英語・タイ語）発行。	全国社会福祉協議会	ボンピモン・チャイブーン、石原淑子、カモン・ミンムアン、スニー・ティチャリヤクン
カオイダン (カンブチア 難民キャンプ)	●西崎憲司記念技術学校 UNHCRに申請した予算がほぼ予定どおりに受け入れられ、来年度のプロジェクト予算の目星がついた。現在は、基礎電気コース開設のためのプロジェクトチームを作り、来年度2期目からのスタートに向けて動き出した。	UNHCR R.I. ジャパン	谷山博史、清水俊弘、ソムヨット・ラタナタム、パイトゥーン・チマチュイ
国境のサイト2、 ノンチャン (カンブチア 難民村)	●補助給食・栄養保健教育 妊産婦、3歳以下の乳幼児を持つ母親を対象に、ドライパックを配給し、栄養教育を行っている。結核患者、栄養不良児やその母親、託児所の子供たちには、食事の配給を行っている。	WFP/UNBRO	テリース、ブーム、チャンチャイ、トンバイ、スピチャ、北代るり、ソムサック、カレン、エッ、前野博美、アドレアン、太平悦子
バナニコム (第三国定住待ち 難民一次収容施設)	●文化オリエンテーション ・日本定住予定者 ①日本語学習の基礎（読み、書き、聞き取り） ②日本語の日常会話の習得 ③日本に関する概略的な理解を促す ④渡航に必要な事柄への理解と実習 ・日本以外の国への定住予定者に手続きの理解を深めてもらう。	天理教千葉	フォード・順子、鶴岡善和 アナン・ブダミリンプラ ティープ、 ウィパ・ロンブリック
地域開発 (バンコク市内の スラム地区)	●奨学金援助 ●クロントイ図書館 子供のための上映会や各種行事を行っている。 ●移動図書 スタッフが交代することもある活動地を縮少し、より密な関係を地域と持つために、活動内容の再検討をしている。 ●移動学習センター(プラティープ財団、FFSC、JSRCとの共同プロジェクト) 9のスラムで学習の機会のない子供たちのため人形劇などで教育、また母親グループの育成を行っている。 ●農村 チャブーン、コラートなどで活動地選定の調査中である。	モラロジーMIRC、 JOFIC、 庭野平和財団、 京都国際青年委員会	サムルアイ・ジョンヨークラン、アルニー・スニットムンヴァイ、リーラ・クンナロン、コメン・スンサマラヤ、バティット・チャンスリヤオン、スパチャイ・セーリー
人材派遣プロジェクト			
フィリピン (PFAC、 バラワン島)	・国際移民委員会(ICM)一第三国定住手続きにともなう医療業務及びキャンプ内でのプライマリ・ヘルスケア。	城西病院	石井弘代

JVCの活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Center
は1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体
です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっ
かけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動
を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形が
できました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日
本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金等
によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、
宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境
にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行います。

▶JVCの会員募集について—会員は、総会に出席し、
JVCの方針などを決定する他、情報・資料の入手、各種の
活動・報告会・上映会・学習会等へ参加することができ
ます。また正会員には自動的に、機関誌(T/E)をお送りい
たします。会員の種別と年会費は以下の通りです。

- ・正会員 (一般会員 10,000円 活動者会員 3,000円
団体会員 30,000円 学生会員 3,000円)
- ・賛助会員 金品による支援(金額は自由です。)

▶機関誌『Trial & Error』のみの購読について

- ・毎号1冊送付 年間購読料 3,000円
- ・毎号4冊送付 年間購読料 10,000円

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC 会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC 東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添下さい。)

▶みなさまの募金を支えるJVCの活動—救援活動をより充
実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の
20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- A. アフリカ難民救援募金 (12月小計 299,194円) アフリ
カの難民・飢餓民への救援プロジェクトに使われます。
 - B. グリーン・フォー・アフリカ募金 (12月小計 359,127円)
アフリカの土壌回復、農業、植林等に使われます。
 - C. インドシナ難民救援募金 (12月小計 61,000円) タイ国
内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - D. カンプチア募金 (12月小計 182,500円) カンプ
チア国内の復興のために使われます。
 - E. タイ・スラム募金 (12月小計 15,000円) バンコ
ク市内のスラムにおける生活向上のためのプロジェクト及
び図書活動に使われます。
 - F. デッグ・スラム奨学金・基金 (12月小計 35,000円) バンコ
ク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - G. タイ農村募金 (12月小計 0円) タイの
農村開発のために使われます。
 - H. 定住難民募金 (12月小計 5,000円) 定住難
民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - I. JVC運営経費募金 (12月小計 68,000円) 現場を
支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
 - J. 無指定募金 (12月小計 248,178円)
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495 (募金種目名をご記入下さい。)
加入者名—JVC 東京事務所

編集後記

▶国際とか国際化という言葉が氾濫している。JVCも日本
語にすると国際という文字が入る。これは同じような名前
の団体が既にあったためだが、いまだに語呂の悪さになじ
めないでいる。

本誌にも行方さんの話が載ったぶどうだなのシンポジウ
ムで、フィリピンの女性が「国際化って何?」といってい
た。これにこだわること自体本物でないのかもしれない。
外国人を呼んだ。でも何を「話したらいいの」ではお話に
ならない。日本評論社から出ている『地域からの国際化』
(1800円)はとても参考になる。外国とのおつきあいは政府
や専門家の人々に任せてはおけないほど重要なことなのだ。



昭和63年1月20日発行(毎月20日発行)

編集人 前川 昌代
発行人 星野 昌子
発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒113 東京都文京区湯島3-1-4 会田ビル5階
☎03(834)2388 FAX:03(835)0519
Telex:7604025 JVCHQ UC

神奈川事務所 〒231 横浜市中区山下町2 産業貿易セ
ンタービル9F (助)神奈川国際交流協
会内 ☎045(671)7082

バンコク事務所 JVC THAILAND
29/3 Soi Saengchan, Sukhumvit40,
Rama 4 Road, Bangkok 10110.
☎391-1117

ソマリア事務所 JVC SOMALIA
c/o UNHCR P.O. Box 2925
Mogadishu,
Telex:794 HICOMREF SM

エチオピア JVC ETHIOPIA
P.O. Box 6941 Addis Ababa

カンブチア JVC KAMPUCHEA
203 Monorom Hotel Phnom Penh
Letter:c/o ICRC, P.O. Box 11-1492
Bangkok.

印刷所 (株)ベスト・プリンティング

*本誌の記事・写真等の無断転載・複写を禁じます。

定価 送料共 350円